

特別展記念講演会講演録(2)

神田コレクションの魅力

藤島建樹(大谷大学名誉教授)

I 神田コレクションの成り立ち

神田コレクションの魅力を語るには、まずこのコレクションの成り立ちに触れねばならない。京都の室町通今出川上ルで江戸時代初期から両替商を営んでいた「津国屋」、これが神田家である。京都の老舗への道を歩むなかで、神田家は京文化の維持・発展に努める町衆としての器量を蓄えた。また、代々敬虔な真宗大谷派門徒としての信仰も深めた。そのような変遷の中で第13代に神田久信(1854~1918)、号を冠して香巖居士と呼ぶ人物がでた。生年は幕末の嘉永7年。香巖は幼い頃から漢学を学び、詩・書にも秀でたという。その才能は当時の文人墨客との交流を通じて醸成して、漢籍・書画・金石文などの鑑識にも及んだ。40歳で京都帝室博物館の鑑別員、50歳で同学芸委員となり、その鑑識眼は専門家の域に達した。自らもそれらの採訪蒐集に努めて、激しい時代変革の渦中で古文化の保護・保存に意を注いだ。

さらに、香巖居士のこの志向を助長したのが、1900年代初頭に到来した東洋学ブームであった。その一つは、殷墟周辺から掘り出された甲骨文字の発現とその研究成果の公表であったし、もう一つは、敦煌千仏洞第17窟からの敦煌文書の出現であった。そのいずれもが世界的規模の衝撃をもたらした。ことに当時の京都大学は、教授に内藤湖南・狩野直喜・小川琢治ら、加えて富岡謙蔵・濱田耕作・羽田亨・桑原隲蔵など東洋学京都学派を作り上げた錚々たるメンバーの教員を擁し、各々が論陣をはって、このブームを盛り上げた。

香巖居士の孫として明治30年(1897)に生まれたのが神田喜一郎博士(号・鬯齋)であ

る。香巖居士に可愛がられて育ち、そのうえ多感な青少年期に祖父とともにブームを見聞き肌で感じた博士がその影響を受けないはずはなかった。敦煌文書の写真が公開され、一般の人々の間にもテンヤワンヤの大騒ぎになったこと。祖父もトンコウ・トンコウと騒ぎまわっていた一人であり、中学校へ入ったばかりの博士も祖父に連れられて展観に行ったこと、とにかく大変な騒ぎであったことを今でもよく覚えていると、後年博士はその時の興奮の様を記している。やがて三高から京都大学へ進んだ博士が、祖父と親交があった内藤湖南に師事し、終生弟子の礼を尽くして師と仰いだことから、祖父の存在とこの頃の影響がいかに大きかったかが覗かれる。

博士と大谷大学の縁は、博士が大学卒業後すぐに本学の教壇に招かれたことに始まる。このとき本学は大学令に則り、佐々木月樵学長を立てて新しい出発をした直後であった。若い気鋭の教員が多く招かれ、博士もそのひとりであった。本学の図書館充実という博士が終生抱いた願いは、この5年間の在任中に始まったのであろう。その後宮内庁図書寮、台北帝国大学を経て、研鑽を積んだ博士が再び本学に帰任したのは戦後の昭和21年(1946)であった。このとき専任在任は2ケ年半であったが、これ以後本学との関係はより親密なものとなった。昭和27年(1952)、博士にもっともふさわしい京都国立博物館長就任、その在任8ケ年余に及んだ。退任後は、それまで蓄積した数々の論文・論著の刊行、『書道全集』の完成をはじめとする諸々の編纂・監修の仕事に傾注した。それらの一つひとつが学問的価値高く、博識と情熱に裏

付けされている。加えて本学への想いは更に深まった。神田家伝来文書や香巖居士蒐集の日本金石拓本類の寄託、本学出版の『中国古印図録』・『宋拓墨宝二種』の監修など、常に本学への厚い配慮は途切れたことがなかった。その博士が、自身の全集刊行を意図し、旧著の補訂・編輯に意欲的に取組んだ。その完成が待たれたが、第2回配本の直後、昭和59年(1984)4月10日急逝。享年86歳であった。

先生の還浄のあと、ご遺族の厚意を体した嫡男故神田信夫先生によって、香巖・鬘齋両氏の蒐集蔵書が一括して本学へ寄贈されたのである。本学ではこれを「神田コレクション」として所蔵し、その学恩に報いる為に『神田鬘齋博士寄贈図書目録』と『神田鬘齋博士寄贈図書善本書影』を編纂し刊行した。

京を代表する「文化人」である祖父と、真の「碩学」と称せられた孫によって、1世紀有余に亘って蒐められたのが「神田コレクション」である。

II 神田コレクションの魅力

神田コレクションの魅力の第1は、『図書目録』を一覧すれば明白だが、その多種・多様さにある。総数1,600余部、冊数にして10,700冊余であるが、その分類は中国に源を発する「漢籍之部」、日本で書かれた「国書之部」、さらに「洋書之部」の各部に亘る。この蒐集が単なる嗜好から出た偏ったものではなく、広い視野と深い学識に支えられたものであることを知らしめる。洋書に例をとると150部余を数えるが、そこにはレミューザの『仏国記』のフランス語訳。ジュリアンによる『孟子』のラテン語訳である『西講孟子』、同じく『大唐西域記』のフランス語訳などをはじめとし、珍しい元曲の翻訳本などもある。「コレージュ・ド・フランス」を中心とし19世紀初頭から盛んになった西欧における東アジア文化の紹介と研究の足跡を辿ることができる。博士がジュリアンの業績を記念して

設けられた「ジュリアン賞」をフランス学士院から授けられたことも宜なるかなといえよう。この洋書類に象徴されるように、多様な蒐集品の全てに、香巖・鬘齋両氏の東アジア文化の保存と紹介への熱情を看取することができる。

その魅力の第2は、この蒐集を通覧することによって、出版と書籍文化の歴史的歩みを学べることである。

刊本以前の鈔本であり、新羅の高僧元暁の撰述である『判比量論』断簡や、空海の書簡集である『高野雑筆集』2巻はいずれも現存最古のものであり、資料的・学問的価値の高さもあって、寄贈後に「重要文化財」指定を受けた逸品中の逸品である。

刊本も、漢籍では宋・元・明・清の各版をそろえ、それぞれが何らかの印刷史上を彩る特徴を備えて興味が尽きない。『仏果園悟真覚禅師心要』2巻は、上巻は日本五山版の一つ臨川寺版であり、下巻は中国・宋代の刊本である。中国で重刊された宋版と日本で出版された覆宋本である五山版との異版の組合せは、日中両国の印刷文化の流れに加えて、両国の仏教を通しての文化伝達の実態もうかがわしめる。題簽には「香巖居士珍藏」とある。

明代になると、書店による出版が進む。戯曲・小説・類書と出版も多面に亘る。このコレクションは、それらにも注意を払い、出版隆盛期の様子を伝えるとともに、ともすれば散逸しかねないこれら庶民文化への視点も失ってはいない。

また『西儒耳目資』3巻は明末の出版で金尼閣撰。金尼閣とは、イエズス会宣教師ニコラ・トリゴーの漢名である。本書は彼が作った中国語発音辞典ともいえるもので、中国語をはじめローマ字表現したものである。出版界にとっても異色のものであり、かつ学術的価値も高い。本書は伝本稀なものであるが、博士が大正11年(1922)北京の廠肆で

偶々目にし購入したもので「多くは観い易からざるの秘笈なり」と、その喜びを記している。博士の目なくしては得られなかったものであろう。のちに数名の学者がこの本を題材とした研究を發表している。

印刷史上に一時期を企したものに、活字使用がある。この古活字版蒐集にも熱心であった。『国朝儒先録』4巻は朝鮮半島の銅活字版であり稀少価値と資料的価値も高い。その半島での技術は秀吉の朝鮮出兵に乗じて日本に渡来し、日本の文禄・慶長・元和の各年間に多く見られる木活字版の出版となり、日本印刷史上の一時代を飾った。この木活字版の蒐集も20本余に及ぶ。

第3の魅力は、何といても、この蒐集された各本のもつ個性の魅力であろう。

前述したものも含むが、例えば、著名な禅僧虎関師鍊撰述の作詩のための音韻の書『聚分韻略』5巻は3種が蒐集されている。もっとも古いものが応永19年(1412)刊の五山版(東福寺版)であり、大英博物館に一本蔵するのみの伝本稀な「香巖秘笈」とされる善本である。次は応永本の覆刻本であり、文明18年(1486)の刊本であるが、禅僧が座右で用いたことを知らしめる細密な注記が書き込まれている。3本目は小型の携帯用に作られており、出版文化を進めた大内義隆の出版、いわゆる大内版である。この3種を並べることによって、字書機能をもった本書が中世以降盛行・珍重されたことを知り得よう。

また、禅宗の基本的書籍として著名な『景德伝燈録』30巻8冊の元版がある。各巻末に刊行のために募財した助縁者の名と金額が細かく明記されている。元末動乱期でありながら、江南での出版状況とそれを支えた多くの信者の存在を伝えて興味深い。

さらに、戯曲本の類がある。1900年代前半になって見直され、研究が進んだ状況が追風になったこともあろうが、元曲の脚本蒐集もコレクションの一つの特色である。「海内の

孤本」と称せられるものも少なくない。博士は『鬘奩藏曲志』に約30種を紹介し、さらに『戯曲善本三種』として覆刻出版して、世に公開された。

以上、数例を示したにすぎないが、このコレクションに含まれる各書籍は、学術的・文化的な重い意味を持っている。加えて、それぞれに秘めた逸話・エピソードの類も枚挙に暇がなく、その興味は止まることがない。博士はそれらを私蔵することなく、機会に応じて、考究を加え紹介することにつとめた。

そのもっとも顕著な例は、貴重仏書の覆刻出版であった。神田家の仏教への信仰の篤さは、この蒐集にも反映している。博士も晩年自らの信仰の深まりの中で、それらの公開を望み、しかるべき専門の学者に解題と研究を託し、自身はその出版に尽力した。自ら筆をとった序文の最後の署名には必ず「白衣の弟子」との一語を冠している。この叢書は「優鉢羅室叢書」と命名された。仏に関わる花、数千年に一度しか遭えない花に喩えて、千載一遇の仏典を公開する敬虔にして篤い信仰者の姿が表現されていよう。

各種善本には『鬘奩藏書絶句』、『東洋文献叢説』など著書が執筆され、その他論考や随想による紹介は多岐多様に及ぶ。亡くなられて後になったが、『神田喜一郎全集』10巻が完成し、その中にその多くは収録された。それによって博士の秀れた見識と温厚な人柄にふれることができるのは幸いである。それらに導かれながら、さらに後進によってこのコレクションの研究が継承されることを期待すると共に、今後もこのような展覧が継続され、神田コレクションの全貌が広く学の内外に公開されることを望みたい。